

アカデミアにおけるキャリア形成に大切なこと



本橋 令子

ロールモデルを見つけよう

6年前、初めて大学に着任したときに、学内のニュースレターか何かに『エキセントリックな教授の背中を追ってここまで来た』というような内容の文章を書いた。なぜか、教員の受けがとても良かったことに驚いた。現在、実際に大学の教員になり、学生が我々の背中から何か学んで欲しいと淡い期待を抱く立場になった。しかし、その気持とは裏腹に、学生が私の背中を見て育っているようには感じられず、専門分野の研究教育だけではなく、母親のような役までこなす毎日である。『研究技術は見て盗め』と指導してくれた20年前の教授の言葉を今でも思い出すが、時代は変わった。

ここで、私が追ってきた背中について紹介したい。修士課程まで在学した明治大学の恩師である秋濱友也教授は学生に夢と希望を与えてくれる、学生の心に花を咲かせてくれる花咲かじいさん（そんなに年配ではなかったので、ごめんなさい）のような人であった。まだ、男女格差の大きい時代で、将来の進路に希望が持てない女子学生に、『国連の職員は女性の方が多い。国際感覚を身につけて頑張りなさい』と励ました。在学中、研究補助のアルバイトをしていた研究所の島本功先生（現奈良先端技術大学教授）はサイエンスの面白さを語り、研究のわくわく感を共有させてくれた。その当時、研究所では、イネにトウモロコシのトランスポゾン（可動遺伝子）を導入し、イネの遺伝子を破壊するトランスポゾンタグラインの作製を試みていた。トランスポゾンの挿入により生じた白と緑のストライプの葉を持つ変異体の前で、研究員と記念撮影をとったことや、Btトキシン（殺虫タンパク質）を導入した植物を食べて死んだイモ虫の死体を数えたことを思い出す。そんな経験が私を研究者への道に押し出した。すっかりトランスポゾンに魅了された私は博士課程で東京大学に移り、冒頭に登場したエキセントリックな天才サイエンティスト大坪栄一教授に出会う。大坪先生は自分が研究しているトランスポゾンの塩基配列を端からすらすら言うことができ、長い塩基配列の中から、一瞬にしてトランスポゾンを見つけ出す天才

的能力を持っていたが、日常は無邪気な子供のような人であった。先生は議論が好きで、データを並べて3時間も話すことがよくあり、説明が下手な私は『あんたの言っていること解らないよ』とよく言われ、泣かされることもしばしばあったが、理論構築方法を学んだ。怖い先生を避け、ラボの身近にいる先輩に実験データを見せ、研究内容を相談していた私に先生は『あんた、あんたの研究について一番よく考えているのは誰だか解りますか？私ですよ。真っ先に相談しに行く所を解っていますか？』と大阪弁でまくしたてられた。その当時は先生の発言の重大さが解らなかったが、今はよく解る。愚かにもつまらない回り道をたくさんしてしまい、そっと心の中で、あの時はごめんなさいと先生に謝る（恥ずかしくて、面と向かって謝れない未熟者です）。わずかな分子生物学技術しか持たない私に実験指導を忍耐強く行ってくれたのは大坪久子先生で、道を外れたり、前に進めなくなったりの研究生活をフォローしてもらい、無事学位を取得し、彼女のアドバイスによりポスドク先を決定した。ポスドク先の理化学研究所の篠崎一雄先生（現理化学研究所植物科学研究センター長）からは、サイエンスの王道やラボのマネージメントを学んだ。自分の興味分野だけでなく広い視野でサイエンスをとらえることの必要性を知り、自分の研究領域を確立する機会を得た。それぞれの先生は個性的でまったくタイプが異なるが、今でも、彼らは私のあこがれの存在であり、目指すべき研究者（ロールモデル）である。私はただひたすら彼らの背を追いつける毎日で、一生追いつくことのない背に、感謝と畏敬の念を抱く。昨今、女子学生のキャリア形成において、ロールモデルの必要性が叫ばれている。必ずしも女子学生のロールモデルが女性研究者である必要はなく、ロールモデルは意外と自分の周囲にたくさんいるのではないかと思う。学生は自分の周囲に無尽蔵にいるロールモデルに気がつかないのだろうか。また、ノーベル賞受賞者を紹介する書籍もたくさん出版されている。『あの研究者のようになりたい』『あの人がやっている研究をやりたい』という気持は、大きなエネルギーを生み出す。自分のロールモデルを見つけることは、人生の宝、

著者紹介 静岡大学農学部共生バイオサイエンス学科分子育種研究室（准教授） E-mail: motohasi@agr.shizuoka.ac.jp

力である。どうか、若手研究者、学生のみなさん、憧れの存在を持ってほしいと思う。我々研究者、教師も憧れてもらうためには、日々自己鍛錬を積み、研究を楽しまないといけない。現在、数多くの女性研究者向けのロールモデル集が出版されている。身近にロールモデルを見つけられない若い皆様は是非、文末に紹介した書籍を手にとってみてほしい²⁻⁴⁾。

メンターの役割と重要性

確かに多くの尊敬すべきロールモデルを持つことができた私はとても恵まれた境遇であるが、すべてが順風満帆であったわけではない、それなりにいばらの道であったようにも思える。比較的能天気な私も若さゆえの愚かさか、つまずき、迷いメソメソすることもあった。そんなときに、必ず助け舟を出してくれるのが久子先生である。久子先生はメンターという言葉が世間で聞かれるようになるずっと前から、私のメンター役をこなしていたように思える。メンターとは専門的な知識、スキル、経験、人脈などが豊富で成功体験を持ち、ロールモデルを示しながら指導、助言を行う人である。また、メンターは指示、命令によらず、対話による気づきと助言によりメンティー（助言を受ける者）自身による自発的、自律的成長を促す。あるアメリカの大学では、assistant professorの採用時に2人のメンターが決まるそうだが、1年後、メンターを1人に減らす時、メンターを変えてもよいシステムになっているそうだ。この話を聞いていいシステムだと感心した。メンティーは採用時、その部局のメンバーについて何も知らず、分野の近い教授がメンターになるのが通常であるが、1年後に若手の育成に積極的で、気の合うメンターに変更できるのはよいことである。その分野のトップの教授は多忙であることが多く、十分な対話時間が作れないことが多く、業績の高い教授が必ずしもいいメンターになるとは限らない。

研究でも人生でも同じだが、何をすべきか、どこへ向かうべきか解らない時がある。そんな時に、自分でも気づいていない胸の内を気づかせ、すべきことを導き出してくれるメンターは大切である。やる気があり、やるべきことが見れば、後は早い。とにかく『Go Go!!』と前進するのみである。将来が不安で気が塞ぐのは先が見えないからである。険しい道の先を実感できれば、怖いことは少ない。行き着く先を少しでも知りたいのなら、多くの人に会い、話をするのである。大概の問題は多くの研究者が乗り越えてきたことなので、先駆者たちが

優しい微笑みをたたえながら、静かに不安を取り除いてくれるだろう。また、多くの研究者を目指す女子学生のための指南書が出版されているので先陣たちの知恵を参考にさせていただきたい^{5,6)}。

これからのアカデミックキャリア形成プラン

めまぐるしく変化していく社会で、アカデミアの世界も多くの問題を抱えているが、悪いことばかりではない。ビル&メリンダ・ゲイツ財団の Grand Challenges Explorations grant は受賞者に10万ドルの研究費が支払われる。この受賞者の割合は、教授より大学院生やポストクの割合が多いという報告を目にした。その背景には、教授はたくさん持っているが、ポストクや学生は持っていない過去の業績や研究環境や設備やリソースなどをカウントしない評価システムをとっているからだ。日本でも文部省科学研究費補助金の萌芽（挑戦の萌芽研究）が同じタイプのグラントになる。今後はこのようなスタイルのグラントや年齢や性別を隠した人事や評価が増えると考えられる。若手支援策も多く立案されるようになり、女性研究者支援も拡大し、20年前に比べれば多くの問題は改善された。

大学の全入学時代を迎え、何十年も続いた学歴社会は崩壊し、『What can you do?』の時代の到来である。性別、年齢、学歴も関係なく何ができるのかによって評価される時代になった。また、多様なキャリアパスが求められ、教員も柔軟なキャリア形成支援を行うよう努めなくてはならない。一子相伝で自分の研究の弟子を育てる時代は終わった。我々教員は心血注いで育てた研究者の卵が、違う世界へ旅立つのを見送る勇気を持たなければならない。彼らがサイエンスの世界で学んだことを産学連携や特許関係だけでなく、行政、司法やマスメディアの世界に役立て、科学立国日本の礎をより強固なものにしてほしいと願う。さあ、みんなで希望を持って空を見上げ、陽を浴びながら、風を切って前進しよう。

- 1) 高橋繁往：日本の歴代ノーベル賞，アスキー新書（2009）。
- 2) 柏木恵子：国立女性教育会館女性研究者ネットワーク支援プロジェクト編，ドメス出版（2005）。
- 3) 小館香椎子（監修）：光できらめく理系女性たち，オプトロニクス社（2008）。
- 4) 小館香椎子：理系女性のきらめく未来，JST（2009）。
- 5) 宇野賀津子，坂東昌子：理系の女の生き方ガイド，講談社（2000）。
- 6) 松下祥子：科学者たちの奇妙な日常，日本経済新聞出版社（2008）。